

【 表 題 】

Risk recognition difference between poultry farmers and
the general population regarding avian influenza

【 著 者 名 】

Yuka Sato

【 所 属 機 関 】

Kurume University School of Nursing

【 Key words 】

avian influenza, Risk recognition, risk image,
Infection prevention education

抄録

目的：本研究では，地域住民・養鶏農家の鳥インフルエンザに対するリスク認知を明らかにすることを目的とした。

方法：無記名自記式質問紙調査で，地域住民 310/1,000 名（回収率 31.0%）と養鶏農家 198/976 名（回収率 20.3%）に実施した。主な調査項目は，感染症についての認知とリスクイメージである。リスクイメージは，恐ろしさ因子（4項目，各項目1点から7点と配点）と未知性因子（4項目）の平均得点を恐ろしさ因子得点，未知性因子得点として算出した。

結果：感染症の認知では，SARS（OR=0.49 $p=.003$ ）で地域住民は養鶏農家に比べ有意に認知が低かった。感染症のリスクイメージにおいて有意差を認めた変数は，鳥インフルエンザの恐ろしさ因子（ $\beta = -0.89$ $p < .001$ ），未知性因子（ $\beta = 0.74$ $p < .001$ ）であった。地域住民は鳥インフルエンザに対して，養鶏農家に比べて恐ろしさのイメージが低く，未知性のイメージは高かった。また養鶏農家は，未知性のイメージは低いものの，恐ろしさのイメージが高かった。

結論：地域住民と養鶏農家の鳥インフルエンザのリスク認知の違いが明らかになった。

キーワード：

鳥インフルエンザ，リスク認知，リスクイメージ，
感染予防教育

表 題

Risk recognition difference between poultry farmers and the general population regarding avian influenza

英文抄錄

Objectives : In this study, Author aimed firstly to bring about a risk recognition among and between both poultry farmers and the general population regarding avian influenza.

Methods : In order to determine a variety of health related information including avian influenza awareness, recognition of infection and risk image, an anonymous self-report questionnaire was conducted. Author measured the risk image on a 7-point scale with 1 representing the lowest and 7 representing the highest risk image. Author calculated and averaged the scores for both the fear factor (4 items) and unknown factor (4 items).

Results : This questionnaire involved 310/1000 (31.0%) members of the general population and 198/976 (20.3%) poultry farmers. In terms of recognition regarding infection, a comparison of the two groups revealed a significant difference in the overall awareness and understanding of SARS (OR=0.49 p=.003), with the general population scoring significantly lower than poultry formers. The Risk image scores result being, Avian influenza scores showed a variables significant difference in fear factor ($\beta = -0.89$ p <.001) and unknown factor ($\beta=0.74$ p<.001). Risk image of fear factor is lower general population than poultry famers, and ignorance factor is high.

Conclusion : These findings show a definite recognition

gap between the two subject groups regarding avian influenza.

Key words: avian influenza, risk recognition , risk image, Infection prevention education

1 I はじめに

2 鳥インフルエンザ(H5N1)は、感染力が強く、ヒトが感染
3 した場合には死亡率54%と致死率も高く、治療法が確立し
4 ていないことから驚異的な感染症である¹⁾²⁾。わが国では、
5 2004年には山口県、大分県、京都府で発生し、2007年に
6 は宮崎県、岡山県で発生³⁾し、発生農家だけではなく、養
7 鶏産業全体においても多大な経済的・精神的な被害が生じ、
8 近隣住民も巻き込み社会的な混乱を招いた。さらに、2009
9 年4月に発生した2009新型インフルエンザ(N1H1)では、
10 世界中で多くの死者をだし、未知のウイルスに対する脅威
11 と心理的不安を人々に与え、社会不安を招いた⁴⁾⁵⁾。この
12 ような、感染症の発生時の状況を踏まえると、未知の感染
13 症に対する備えを持つことが極めて重要なことである。こ
14 れに対し、厚生労働省は2008年に鳥インフルエンザ
15 (H5N1)を二類感染症に指定し、入院措置等の法的根拠を
16 整備するとともに、新型インフルエンザを感染症法に位置
17 づけ発生直後から対策を実施できるようにしている。

18 こうした目に見えない感染症に対する社会的な混乱を
19 避けるためには、一方で地域住民への啓発活動といったリ
20 スクマネジメントが重要であり²⁾⁶⁾⁷⁾、特に感染症の集
21 団発生においては、個々の感染防御が基盤であり、1人ひ
22 とりの感染症に対する知識・技術の修得が重要である。

23 鳥インフルエンザ(H5N1)は、東南アジアを中心に感染が
24 確認され、ヒトではアジア、中東、アフリカを中心として
25 感染が報告されている。日本においても、鳥インフルエン
26 ザの発生は鳥類のみであるが、感染の拡大を最小限に抑え、
27 更なる二次感染、新たな感染症の発生を防ぐためには、養
28 鶏農家だけでなく、地域住民も同様に鳥インフルエンザ
29 (H5N1)理解し、適切な対処行動がとれることが望ましいと
30 考える。特に鳥インフルエンザ(H5N1)は、トリ-トリ感染
31 の発生により、1羽でも認められた場合養鶏農家にとって
32 は莫大な被害となる。その一方で、トリ-ヒト感染、ある

33 いはヒト-ヒト感染を危惧する地域住民への影響も大きい。
34 また、感染症の予防行動には、感染症についての知識や認
35 識が大きく影響を及ぼすと考える。

36 そこで、本研究は地域住民・養鶏農家の鳥インフルエン
37 ザに対するリスク認知を明らかにすることを目的とした。
38

39 II 研究方法

40 1 調査対象者

41 1) 地域住民について

42 A町は九州圏内に位置し、人口約15,000人であり、
43 自然豊かな町である。第1次産業は16.0%を占めて
44 おり、養鶏場は1軒である。A町の協力を得てA町の
45 承認が得られた20歳～60歳の住民を対象とし、住民
46 基本台帳からの対象者の抽出を行った。対象者の抽出
47 は、層化2段階無作為抽出（性・年齢）により1,000
48 名を抽出した。対象者の抽出、郵送に関しては、個人
49 情報保護のためA町が実施した。

50 2) 養鶏農家について

51 NTT九州電話帳に養鶏と記載されているすべての養
52 鶏場の事業主976名を対象とした。

53 2 調査方法

54 調査は、対象者に無記名自記式質問紙を郵送し、対象者
55 が回答後、返信用封筒を対象者自身が投函を行ない回収し
56 た。

57 3 調査内容

58 1) 基本的属性：年齢・性別など

59 2) 鳥インフルエンザに対する取り組み

60 : 対策の認知状況など

61 3) 感染症についての認知：新型インフルエンザ、SARS、
62 HIV、結核、鳥インフルエンザの5つの感染症に対す
63 る主観的認知で「聞いたことがない」「聞いたことが
64 ある程度」「なんとなく知っている」「知っている」

65 で回答を求め配点をそれぞれ 1～4 点とし，得点が高
66 いほど認知が高いとした。

67 4) リスクイメージ：季節性インフルエンザ，SARS，HIV，
68 結核，鳥インフルエンザ 5 疾患に関して，三橋らのリ
69 スクイメージ尺度⁸⁾⁹⁾を使用した。リスクイメージ尺
70 度は，恐ろしさ因子，未知性因子の 2 つの下位項目か
71 らなり，恐ろしさ因子は脅威度（ふつう－恐ろしい），
72 致命度（致命的でない－致命的である），将来的影響
73 （将来まで影響が残らない－将来まで影響が残る），
74 世界的影響（世界的な影響がない－世界的な影響があ
75 る）の 4 項目であり，未知性因子は科学的未知（科学
76 的に分かっている－科学的に分かっていない），認知
77 度（危険を正確に知らない－危険を正確に知っている），
78 観測可能性（観察することが可能－観察すること
79 が不可能），接触性未知（接触している人が知らない
80 －接触している人が知っている）の 4 項目で構成さ
81 れる。各項目の得点は 7 段階尺度（1 点から 7 点と配
82 点）とし，恐ろしさ因子（4 項目）と未知性因子（4 項目）
83 の平均得点を恐ろしさ因子得点，未知性因子得点とし
84 て算出した。

85 5) 鳥インフルエンザ発生時の対応：鳥インフエンザの
86 発生経験の有無，鳥インフルエンザの発生の原因など
87 は五肢択一にて回答を得た。

88 4 調査時期

89 地域住民：2010 年 12 月中旬～2011 年 1 月下旬

90 養鶏農家：2011 年 1 月上旬～2011 年 2 月下旬

91 5 分析方法

92 各質問項目について，地域住民・養鶏農家の 2 群間比較
93 を行った。5 つの感染症の認知を従属変数とし，独立変数
94 を地域住民，養鶏農家とし性・年齢を調整してロジスティ
95 ック回帰分析を行った。ここで用いた従属変数の感染症の認
96 知は，「聞いたことがない」「聞いたことがある程度」を

97 『認知なし』とし「なんとなく知っている」「知っている」
98 を『認知あり』とした。また，リスクイメージについては，
99 各感染症に対するリスクイメージの恐ろしさ因子得点と
100 未知性因子得点を従属変数とし，独立変数を地域住民，養
101 鶏農家とし性・年齢を調整して重回帰分析を行った。統計
102 には SPSS statistic19 を用い，有意水準は $p < .05$ とした。

103 6 倫理的配慮

104 研究の実施は，所属機関の倫理委員会の承認（2010年
105 10月22日研究番号10196）を受けて実施した。質問紙調
106 査では，調査目的・方法・内容を文書にて説明を行い，質
107 問紙への回答の返信をもって，調査への同意が得られたこ
108 ととした。また拒否する権利や同意は自由意志であること
109 を文書で説明し了解を得た。調査内容・結果について，対
110 象者から問い合わせがあった場合には説明を行うことを
111 文書にて説明を行った。調査結果は研究以外の目的には使
112 用しないことを説明した。また質問紙は研究終了後，速や
113 かに破棄することを説明した

114

115 III 研究結果

116 回収率は，地域住民 312/1,000名（31.2%）・養鶏農家
117 201/976名（20.6%）であった。このうち性別に欠損がな
118 い地域住民 310/1,000名（31.0%）・養鶏農家 198/976名
119 （20.3%）を有効回答とし，分析対象とした。

120 1 基本属性

121 対象者の年齢は，地域住民 42.5 ± 11.6 歳であり，養鶏
122 農家 56.0 ± 14.1 歳であり地域住民に比べて年齢が高かつ
123 た（ $p < .001$ ）。また年齢区分では，地域住民 41歳～60歳
124 177名（57.1%），養鶏農家 41歳～60歳 97名（49.0%）
125 が最も多く，地域住民と養鶏農家の年齢区分に有意な差を
126 認めた（ $p < .001$ ）。性別は，地域住民 男性 149名（48.1%）
127 女性 161名（51.9%）であり，養鶏農家 男性 183名（92.4%）
128 女性 15名（7.6%）であり養鶏農家に有意に男性が多かつ

129 た ($p < .001$) (表 1)。

表 1 挿入

130 2 鳥インフルエンザに対する取り組みの実施と認知

131 行政における鳥インフルエンザ発生防止対策について、
132 地域住民は「よく知っている・知っている」が 125 名
133 (40.3%)、「あまり知らない・知らない」が 184 名 (59.4%)
134 であった。これに対し養鶏農家では「よく知っている・知
135 っている」187 名 (94.5%)、「あまり知らない・知らない」
136 10 名 (5.1%) であった。

137 また、鳥インフルエンザの発生予防対策の具体的な指針
138 である鳥インフルエンザ発生予防対策の認知については、
139 地域住民はすべての項目で養鶏農家よりも有意に低かつ
140 た ($p < .001$)。また発生予防対策では、地域住民の認知度
141 が 4 割以下であった項目は、飲料水等の汚染による侵入防
142 止 100 名 (32.8%)、従業員の教育 89 名 (29.0%) であった
143 (図 1)

図 1 挿入

144 行政の取り組みの拠点である家畜保健衛生所について、
145 地域住民で「知っている」と回答したものは 35 名 (11.3%)
146 であった。

147 3 感染症の認知

148 5 つの感染症の認知の平均得点を表 1 に示す。また、5
149 つの感染症の認知について、ロジスティック回帰モデルを
150 使用して、養鶏農家に対する地域住民のオッズ比および
151 95% 信頼区間を算出した (表 2)。

表 2 挿入

152 感染症の知識に有意な差を認めた感染症は、SARS であ
153 りオッズ比 0.49 (95% 信頼区間 0.31-0.78 $p = .003$) と地
154 域住民が養鶏農家に比べ低くかった。また有意な差は認め
155 られないが、鳥インフルエンザもオッズ比 0.47 (95% 信
156 頼区間 0.22-1.01 $p = .054$) と地域住民が養鶏農家に比べ
157 低かった。

158 4 感染症のリスクイメージ (リスク認知)

159 感染症のリスクイメージの各因子の平均得点を表 1 に
160 示す。また、感染症のリスクイメージについて、重回帰分

161 析の結果を表3に示す。感染症のリスクイメージに有意差
162 が得られた変数は、鳥インフルエンザの恐ろしさ因子
163 ($\beta = -0.89$ $p < .001$) と未知性因子 ($\beta = 0.74$ $p < .001$) で
164 あった。つまり、鳥インフルエンザについては、地域住民
165 は養鶏農家に比べて恐ろしさのイメージが低く、未知性の
166 イメージが高かった。

167 地域住民、養鶏農家ごと各疾患に対する2種類の因子の
168 得点を算出した。恐ろしさ因子をx軸、未知性因子をy軸
169 とし、各因子のとりえる値の間である4を境界として4
170 つの象限にわけ、地域住民、養鶏農家の別に各疾患の得点
171 を図示した(図2)。リスク認知は、右に位置するほど恐
172 ろしいイメージであり、上に位置するほど未知性の高いイ
173 メージであることを示す。鳥インフルエンザは、地域住民
174 は第1象限(4.91, 4.43)、養鶏農家は第4象限(5.73,
175 3.49)であった。季節インフルエンザは、地域住民は第1
176 象限(3.98, 4.10)、養鶏農家は第4象限(3.85, 3.95)
177 であった。他の感染症は、地域住民・養鶏農家ともに同象
178 限に分類された。

図2挿入

179 5 鳥インフルエンザの発生時の状況・対応

180 鳥インフルエンザが身近で発生したことがあると回答
181 したものは、地域住民5名(1.6%) 養鶏農家56名(29.0%)
182 であった。身近で発生した際の被害について、地域住民は
183 「経済的損失」2名(0.7%) 「心理的負担」2名(0.7%)、
184 養鶏農家は「経済的損失」29名(16.7%) 「心理的負担」
185 26名(14.9%)と回答した。

186 感染症発生時行政(国)に望むことについて、地域住民
187 は「生活の方法に関する知識の提供・支援」37.4%(116
188 名)、養鶏農家は「原因の究明」27.2%(54名)が最も多か
189 った(図3)。また、鳥インフルエンザの発生の原因とし
190 て影響が強いと思うことについて、地域住民は「施設の危
191 機管理能力の低下」31.0%(96名)、養鶏農家は「施設の
192 危機管理能力の低下」21.2%(42名)が多かった(図4)

図3・4挿入

193 鳥インフルエンザの発生の対策として最も最優先され
194 るべきものについて、地域住民は「病院・保健所などの医
195 療機関の対応」33.9%（105名）、養鶏農家は「感染症が発
196 生した施設側の適切な対応」23.8%（47名）が多かった（図
197 5）。

図 5 挿入

198

199 IV 考察

200 本調査により地域住民と養鶏農家の鳥インフルエンザ
201 についてのリスク認知の違いが明らかになった。

202 鳥インフルエンザ知識については、地域住民と養鶏農家
203 に違いは認めなかった。地域住民と比べ養鶏農家では、こ
204 れまでの国内での発生にともない鳥インフルエンザ
205 (H5N1)発生予防対策が取り組まれており、近年では鳥イン
206 フルエンザ(H5N1)の発生を想定した訓練も行われている
207 ¹⁰⁾ことから知識が高いと考える。また鳥インフルエンザ
208 発生時(H5N1)には、マスメディアを通じて多くの情報提供
209 が地域住民に対しても行われていることから知識の普及
210 につながったのではないかと考える。しかし、鳥インフル
211 エンザ(H5N1)発生予防対策については、地域住民の認知は
212 低く、感染予防行動を実施するまでの知識の習得には至っ
213 ていないのではないかと推測する。

214 リスク認知では有意差を認めた感染症は、鳥インフルエ
215 ンザであり恐ろしさ因子($\beta = -0.89$ $p < .001$)、未知性因子
216 ($\beta = 0.74$ $p < .001$)であった。このことから、鳥インフル
217 エンザに対して、地域住民は養鶏農家に比べて、鳥インフ
218 ルエンザに対して恐れが低く、未知性因子が高いことから、
219 鳥インフルエンザの知識が不足していること、鳥インフル
220 エンザの発生が身近で経験した地域住民は、1.6%と低かつ
221 たことから、身近なものではない感染症に対して恐れを感
222 じていないのではないかと推測する。一方で養鶏農家は、
223 地域住民に比べ恐ろしさ因子が高く、未知性因子が低いこ
224 とから、鳥インフルエンザ(H5N1)についての発生予防対策

225 を実施していることから専門的な知識を有していること
226 が未知性因子を低くしているのではないかと考える。この
227 ことは、鳥インフルエンザ(H5N1)の発生予防対策の認知状
228 況からも言えることである。しかし、鳥インフルエンザ
229 (H5N1)発生予防措置を実施しているが、日本国内で鳥イン
230 フルエンザ(H5N1)が発生している現状や、本研究結果にお
231 いても発生時の被害について、養鶏農家は経済的な負担や
232 心理的負担を挙げていることから、発生時の現状等も考
233 慮し、恐れとして認知しているのではないかと考える。そ
234 のため、専門的な知識を有しているにもかかわらず、鳥イ
235 ンフルエンザに対する恐れが高くなっていると考える。

236 また、今回感染症に対する認識の現状を捉えるためにリ
237 スク認知図の作成を行った。リスク認知図は、対象者の属
238 性からリスク認知状態の予測や感染症の致死率や感染力
239 などの実際の医学的リスクとのズレを明らかにする^{8) 9)}
240 ¹¹⁾ことが報告されている。また、リスク認知図では、リス
241 ク認知の安定への方向は第4象限の方向である¹¹⁾と報告
242 がなされており、今回の結果から、鳥インフルエンザのリ
243 スク認知では、養鶏農家に対しては感染症の発生を未然に
244 防ぎ、二次感染を防ぐためにも、鳥インフルエンザ発生時
245 の経済的損失といった実質的な内容を考慮した上で、恐ろ
246 しさ因子を低下させるための情報提供や対策・措置、地域
247 住民に対しては、未知性因子を低下させるための鳥インフ
248 ルエンザに対する正しい理解を得るための情報提供を行
249 うことが必要であると考え。また、地域住民が行政へ望
250 むことでは、生活の方法に関する知識の提供・支援が挙げ
251 られており、感染症が発生している状況の中で、どのよう
252 に感染症から身を守っていくためにどのように対処すべ
253 きなのかを明確に示し適切な行動へ導いていくことが求
254 められている。これらの情報提供により知識を深め、予防
255 対策を知ることで過剰な恐れを抱くことなく適切な予防
256 行動がとれると考える。このように、感染症に対する認識

257 を明らかにすることにより，対象となる個・集団が感染症
258 をどのように受け止め，認識しているかを把握することに
259 つながり，これからの感染症予防対策の方向性を検討する
260 上でも有益であると考ええる。

261 今回の調査では，鳥インフルエンザを，強毒性（H5N1）
262 であるか否かを区別しておらず，地域住民，養鶏農家が，
263 鳥インフルエンザの設問に対して，鳥インフルエンザ
264 （H5N1）として認知したのか，鳥インフルエンザ（H5N1）以外
265 と認知したのかは明らかにできない。しかし，現段階では
266 鳥インフルエンザから受ける印象が，地域住民と養鶏農家
267 で異なることは明らかであり，これらの認識の違いが，地
268 域住民の鳥インフルエンザ（H5N1）発生時に対する誤った
269 イメージをもたらし，社会的混乱を招くことにつながるの
270 ではないかと推測する。

271 また地域住民，および養鶏農家の年齢・性別が異なって
272 おり世代間のリスク認知については言及することはでき
273 ない。養鶏農家において全体的には年齢層が高く，男性が
274 多く占めていたが，2003年農業構造動態調査によると，
275 養鶏業従事者の年齢階層は，65歳以上が29.1%を占め，39
276 歳以下は11.6%であり，今回の対象者は現養鶏農家の年齢
277 階層を反映する者であると考ええる。また，男性が多くを占
278 めたことについては，対象者の選定にあたり，電話帳に登
279 録された養鶏農家としたため，養鶏農家の事業主にあたる
280 対象が回答をしているために，多くなっていると推測する。
281 しかし，今回の対象は養鶏業を営む専門家として鳥インフ
282 ルエンザ（H5N1）発生予防対策の主な担い手であり，より身
283 近である鳥インフルエンザの認識を把握することは妥当
284 であると考ええる。地域住民についても生産年齢層を捉えて
285 おり，社会・経済を担う年齢層にあることからこれらの
286 年齢層がどのように鳥インフルエンザについて捉えてい
287 るのかは重要な事であると考ええる。感染症についての意識
288 については，社会的背景などが影響を及ぼすと考えられる

289 ため今後は世代間や性別による認識の違いにも配慮し、さ
290 らに検討を行っていくことが必要であると考える。

291 本研究の限界として、分析にあたっては対象者の年
292 齢・性別の調整を行い実施したが、回収率が低いことか
293 ら母集団を正確に反映するものではなく、偏りは不可避
294 であると考える。今回の結果は、感染症に対して関心が
295 ある高い対象者が回答をしている可能性が高く、一般的
296 な集団よりも感染症のリスクを低く捉えているのではな
297 いかと推測される。また、養鶏農家は任意掲載である電
298 話帳より対象者から抽出していることから、今回の調
299 査結果は限られた集団の結果であることから一般化する
300 ことは限界があると考える。しかし、これまでに十分に
301 把握されていなかった鳥インフルエンザに対するリスク
302 イメージを明らかにしようとした本研究は、感染症拡大
303 を防ぐためにリスクイメージを改善する教育的介入の可
304 能性を示した点で公衆衛生的意義を有すると考える。

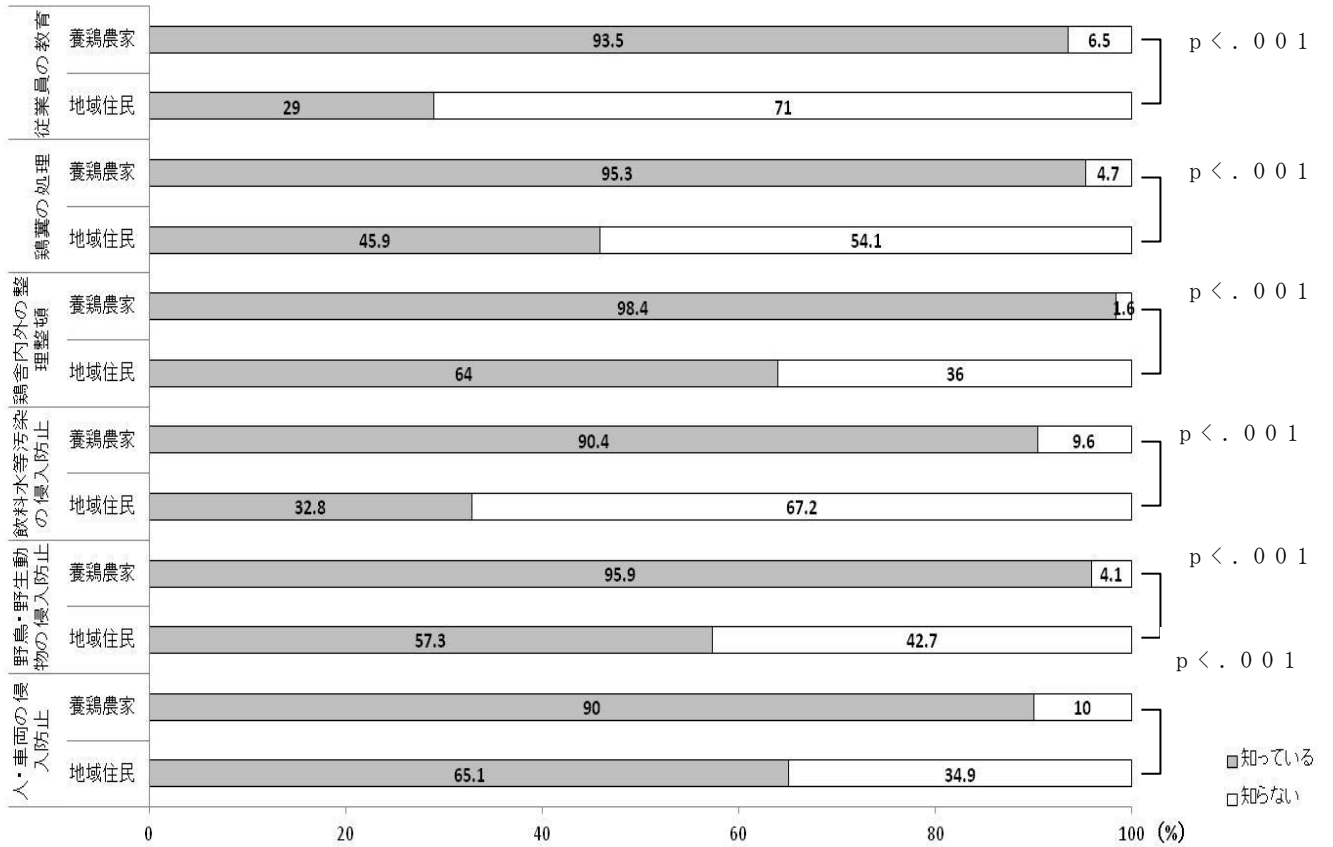
305

306 文献

- 307 1) 押谷仁．世界の状況とWHOの対応．公衆衛生 2003；
308 67(11)：826-830.
- 309 2) 玉記雷太，神垣太郎，押谷仁．わが国における新型イン
310 フルエンザの流行．インフルエンザ 2009；10(1)：33-37.
- 311 3) 瀧口俊一．宮崎県で高病原性鳥インフルエンザへの対応．
312 成人病と生活習慣病 2008；38(11)：1261-1267.
- 313 4) 阿部信次郎，藤井達也，箱崎幸也．新型インフルエンザ
314 対策におけるリスクコミュニケーション．成人病と生活
315 習慣病 2008；38(11)：1268-1273.
- 316 5) 勝田吉彰．大規模感染流行が及ぼす影響と対策-SARSの
317 経験から新型インフルエンザパンデミックへ-．
318 臨床精神医学 2006；35(12)：1719-1772.
- 319 6) 山口佳寿博，坪水敏夫，秋本一，他．新型インフルエン
320 ザ対策．地域医療にできること．Mebio 2008；25(11)：

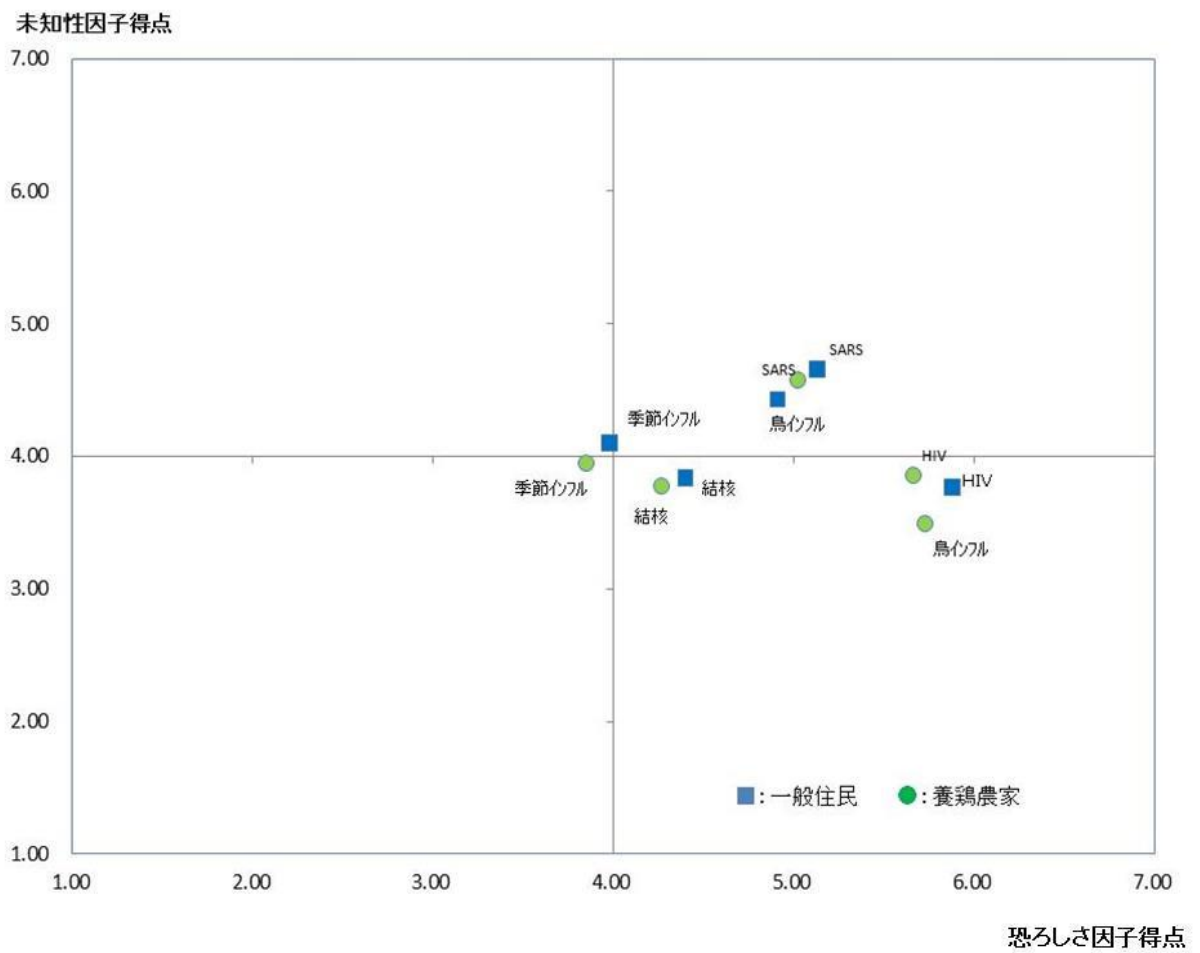
- 321 56-67.
- 322 7) 丸山英二. 呼吸器系新型インフルエンザ流行時の社会
323 的対策. 感染と抗菌薬 2007; 10(4): 347-354.
- 324 8) 三橋睦子, 大坪靖尚. 医療従事者の感染防具着用が人に
325 与える影響と事前情報との関連性. 日本災害看護学会誌
326 2007; 9(2): 2-14.
- 327 9) 三橋睦子. 感染症リスク認知地図の試作と有用情報抽
328 出の可能「リスクイメージ」と「リスク認知への影響因
329 子」に関する情報抽出. 日本看護科学学会誌 2004;
330 24(3): 60-71.
- 331 10) 村上弘子, 佐野恭一. 養鶏の友: 市町村に対する HPAI
332 防衛体制構築の取り組み. 東京: 日本畜産振興, 2009;
333 20-23.
- 334 11) 三橋睦子, 辛銀娟, 大坪靖直, 他. SRAS 集団発生の際
335 験をとおした感染症の知識とリスク認知との関連性出.
336 久留米医学会雑誌 2007; 70(3・4): 78-86.

図 1 鳥インフルエンザ発生予防対策の地域住民と養鶏農家の認知



* カイ二乗検定の結果

図 2 地域住民と養鶏農家の感染症に対するリスクイメージ



*各因子得点は，恐ろしさ因子（4項目），未知性因子（4項目）の平均得点を算出した。

図 3 地域住民と養鶏農家が鳥インフルエンザ発生時の対応として望むこと

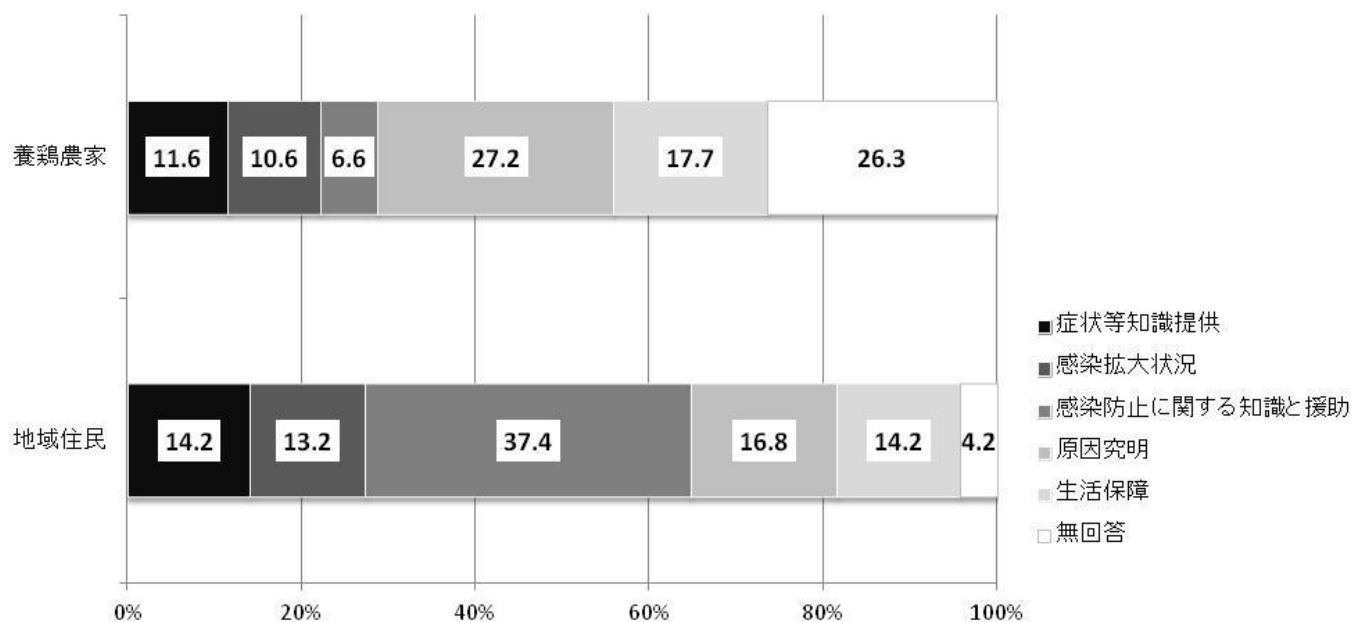


図 4 地域住民と養鶏農家が鳥インフルエンザの発生原因として思うこと

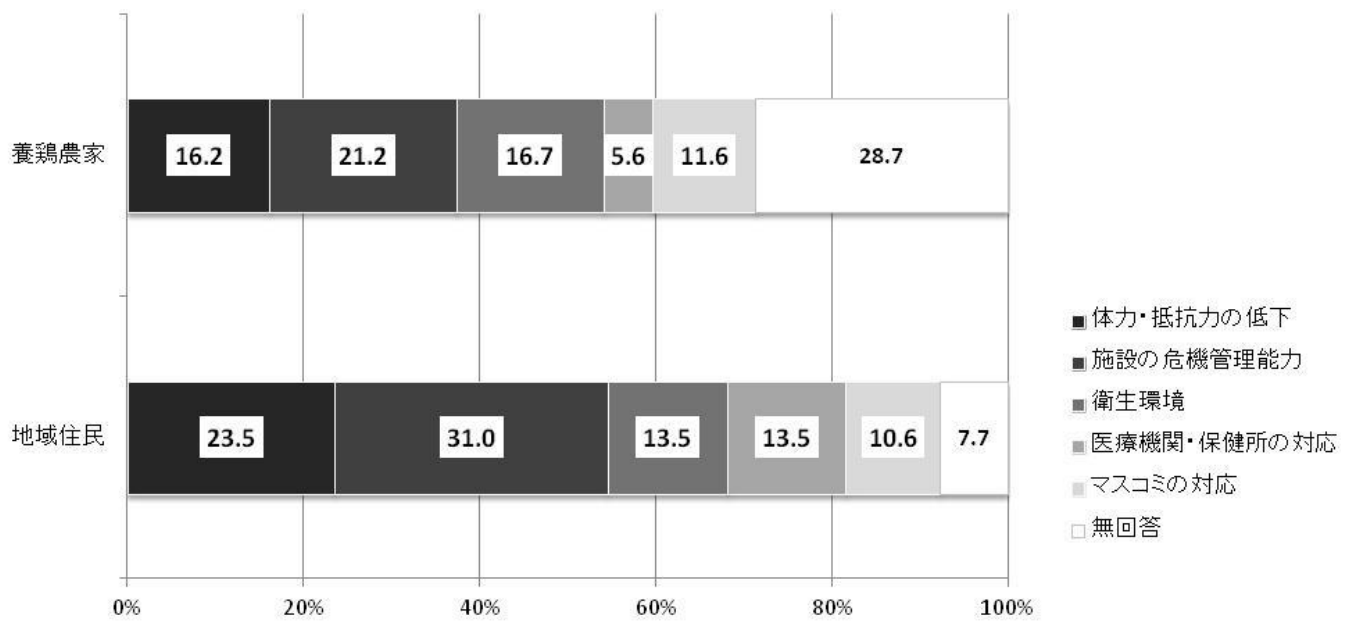


図 5 地域住民と養鶏農家が鳥インフルエンザの発生対策で優先されるべき対策と思うこと

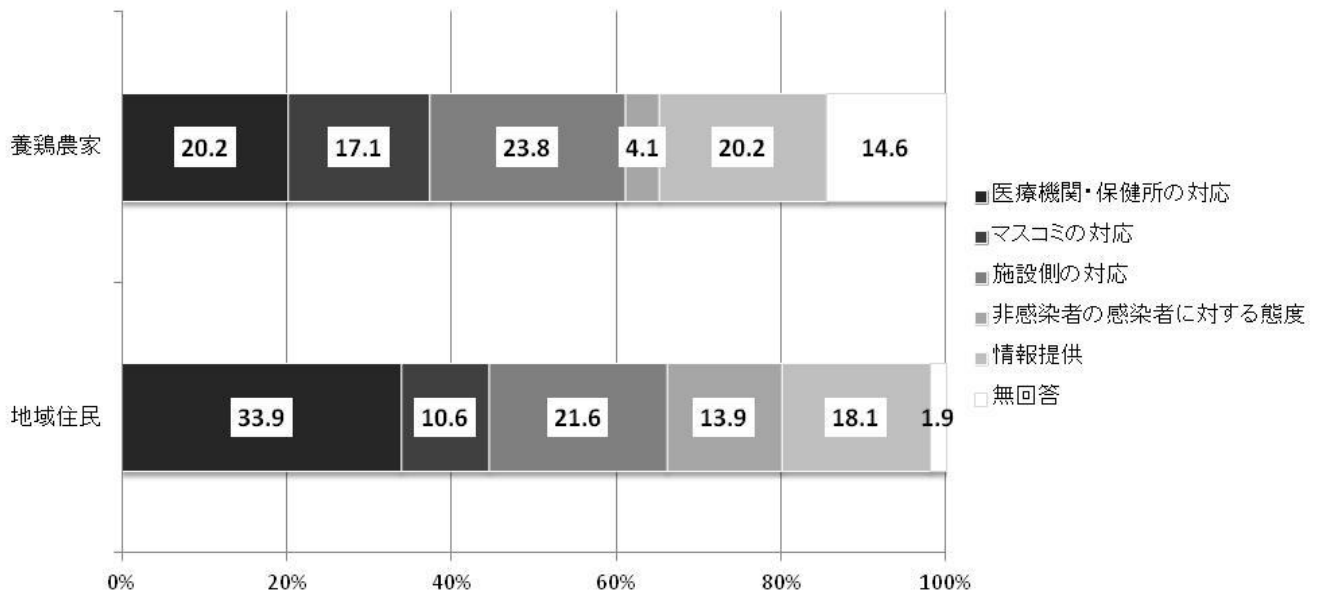


表 1 基本属性

		地域住民 n = 310 人 (%)	養鶏農家 n = 198 人 (%)	χ^2 test p 値
年齢区分	21～40歳	133 (42.9)	20 (10.1)	< .001
	41～60歳	177 (57.1)	97 (49.0)	
	60～80歳	—	75 (37.9)	
	80歳以上	—	3 (1.5)	
	無回答	0 (0.0)	3 (1.5)	
性別	男性	149 (48.1)	183 (92.4)	< .001
	女性	161 (51.9)	15 (7.6)	
感染症の認知		平均 (SD)	平均 (SD)	
	新型インフル	3.49 (0.73)	3.57 (0.72)	
	SARS	2.70 (1.09)	2.96 (1.00)	
	HIV	3.67 (0.61)	3.57 (0.74)	
	結核	3.52 (0.69)	3.57 (0.69)	
	鳥インフル	3.35 (0.74)	3.78 (0.63)	
感染症のリスクイメージ		平均 (SD)	平均 (SD)	
季節インフル	恐ろしさ因子	3.98 (1.05)	3.85 (1.34)	
	未知性因子	4.10 (1.12)	3.95 (1.08)	
SARS	恐ろしさ因子	5.13 (1.10)	5.02 (1.17)	
	未知性因子	4.66 (1.06)	4.58 (1.15)	
HIV	恐ろしさ因子	5.88 (1.10)	5.66 (1.17)	
	未知性因子	3.77 (1.18)	3.86 (1.20)	
結核	恐ろしさ因子	4.40 (1.26)	4.27 (1.20)	
	未知性因子	3.84 (1.10)	3.78 (1.14)	
鳥インフル	恐ろしさ因子	4.91 (1.12)	5.73 (1.18)	
	未知性因子	4.43 (1.01)	3.49 (1.33)	

表 2 養鶏農家に対する地域住民の感染症についての
認知

	OR	95%信頼区間	p 値
新型インフルエンザ	0.54	0.26 - 1.11	0.092
SARS	0.49	0.31 - 0.78	0.003
HIV	1.38	0.59 - 3.21	0.454
結核	1.10	0.50 - 2.43	0.806
鳥インフルエンザ	0.47	0.22 - 1.01	0.054

* 年齢・性別で調整したロジスティック回帰分析結果

表 3 養鶏農家に対する地域住民の感染症のリスクイメ
ージ

		β	95%信頼区間	p 値
季節性 インフルエンザ	恐ろしさ因子	0.07	-0.19 - 0.33	0.601
	未知性因子	0.17	-0.86 - 0.43	0.193
SARS	恐ろしさ因子	-0.03	-0.29 - 0.23	0.821
	未知性因子	0.17	-0.08 - 0.43	0.179
HIV	恐ろしさ因子	0.05	-0.20 - 0.31	0.677
	未知性因子	0.09	-0.18 - 0.36	0.534
結核	恐ろしさ因子	-0.09	-0.37 - 0.18	0.505
	未知性因子	-0.09	-0.34 - 0.17	0.498
鳥 インフルエンザ	恐ろしさ因子	-0.89	-1.15 - -0.63	<0.000
	未知性因子	0.74	0.49 - 1.00	<0.000

* 年齢・性別で調整した重回帰分析結果

謝 辞

本研究にあたりご協力を頂きました対象者の皆様，また本研究遂行にあたりご指導を頂きました久留米大学医学部看護学科教授三橋睦子先生，久留米大学医学部環境医学講座教授石竹達也先生に感謝いたします。

なお，本研究は平成 22 年度文科省科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号 22792164）の助成を受けて実施したものである。